

キャサリン・マンズフィールドの思い出 (チェスラヴ・チェコヴィッチの回想録より)

私は長いこと、1923年にキャサリン・マンズフィールドがなくなった後に起きたある出来事が頭から離れなかった。

そのころプリオーレではとても集中的な活動が展開されていた。真夜中にムーヴメンツの稽古が終わった後、われわれは食堂に集まるのを習慣としていた。そこに行くと、やさしいアデルさんが、新鮮なミルクかヨーグルト、または私の大好物のバターミルクの乳清をふるまってくれる。もう数ヶ月も前から、マダム・ド・ザルツマンもリルもオルギヴァンナも、他のご婦人や若い娘たちも、スタロツツァもL・IもA・Mも、そして私自身も、ムーヴメンツの稽古が終わると、いっしょにホールを出て食堂に行き、このごちそうを楽しんだ。こうして十五分ほど一息ついた後で、みんな各自の寝室に戻った。

キャサリン・マンズフィールドが1月の初旬になくなるまで、われわれのあいだでは彼女の話が絶えなかった。われわれがムーヴメンツを練習する場に彼女がいてくれるのは、とてもうれしいことだったからだ。夜遅くまでわれわれとつきあえるように、彼女は午睡をとっていた。稽古の後にスタディハウスを出るときには、彼女もいっしょだった。彼女がたたえているなにか、彼女が放射するなにか、それがなんであったのか、私にはわからない。だが、彼女のかもしだすものは心地よく、われわれはそれにとってもなじんでいたもので、われわれは彼女とひとつだった。

1月9日、彼女は永遠に目を閉じた。彼女は葬られたが、われわれのあいだには依然として彼女の存在感が漂っていた。彼女のことが話題にのぼることはなくなったが、ムーヴメンツの稽古の後で食堂に行くときには、彼女のことが思い出された。ある晩、ムーヴメンツの稽古の後、私は[スタディハウスから本館の屋敷へと]数人の仲間たちといっしょに、大きなモミの木の並ぶ小道を歩いていた。どんなことを話題にしたかは覚えていないが、道の途中で何度かお互いに言葉を交わした。夜の静寂があまりに深いので、それをせずにはいられなかった。

突然、マダム・ド・ザルツマンが足を止め、われわれも身を堅くした。後ろを歩いていた女たちがマダム・ド・ザルツマンにぶつかった。

「ケスキリヤ？ ケスキリヤ？」(なんなの？ だれなの？)

それからマダム・ド・ザルツマンは、我に帰ったかのように、次のように言った。

「気にしないで。行きましょう。なんでもない。行きましょう」

いったいどうしたのか不審に思いながら、われわれは道を進んだ。

ともに同じムーヴメンツに取り組んだ私の昔からの仲間たちは、当時のことをけっして忘れていないはずだ。だが、そういう人たちとのあいだでこの出来事を話題にしたことはずっとなかった。

ところが、1952年、いつもはアメリカに暮らすオルギヴァンナが、その夫である有名な建築家、フランク・ロイド・ライトとともにフランスを再訪したとき、この出来事が話題になり、その場には私のほか、マダム・ド・ザルツマンもいた。そのときのことを思い出し、マダム・ド・ザルツマンは言った。

「キャサリン・マンズフィールドが私たちに会いに来たの」

キャサリン・マンズフィールドはほんとうにわれわれとともにそこにいたのだ。彼女の言葉を聞いて、私は改めてそう思った。

その出来事からしばらくたつと、それまでわれわれのあいだに漂っていたキャサリン・マンズフィールドの存在感は消えていった。

(Tchesslav Tchehovitch, *Tu L'Aimeras - Souvenirs sur Georgii Ivanovitch Gurdjieff*, pp. 38-39)